

# 山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察

——学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に——

内 山 宗 昭

## (序)

山鹿素行（一六二二—一六八五年）の人間形成論、教育論・学問論に関して、筆者は継続的に考察を試みてきたが、本稿では、素行のそれら教育論・学問論が述べられている思想構成上の位置について、やや総合的に検討したい。これに類する検討は、既に、学習論・児童教育論・学校論・教師論等各領域の各論の考察時に、各々内容の文脈との関わりでは行なっているが、ここでは素行の思想全体との関連の中で、改めて教育論・学問論の位置や構成にのみ焦点を当てて、その性格・意味を検討することとする。従って、本論では、内容の前提にある主に形式的な面に注意を向けた。

本稿では、はじめに、教育論の提示される素行の著作について、思想時期との関係における変遷をみ、その位置を検討する。次には『山鹿語類』に現われた教育・学問論の各論の部分に注意して、その構成的な位置を考察する。その上で、構成の基底にある思想的な主

題を探り、その教育論としての意義を考察し、素行の教育論記述の基底の主題とその性格を検討することとする。

## (1) 教育論の提示される著作と位置

素行の教育論・学問論に相当する所論を大別してみると、(1)主に性理学的解釈を中心に人間形成や教学の意義を説明する論、(2)具体的教育制度や教育方法を指摘した論、(3)兵学の中で教学の意義を説く論、(4)学問史を記述した論に互っている。<sup>(1)</sup>

(2)は、特に単なる意義論にとどまらず具体的方法論に踏み込んで各論を展開している部分であり、近世前期にあつてその具体性が先行研究により評価されてきた幾つかの説述を含む部分である。それはまた①学問・学習の方法を述べる学習論、②子どもの教育方法の記述を含む家庭教育論、③学校設置の意義を説くことを含む学校論・社会教化論を主に内容としている。(4)は主に(2)の①の歴史的な例証として取り上げられているものである。

著述年順に主たる著作の中に右に該当する記述をみてみると、四教一致期では『修身受用抄』<sup>(3)</sup>（慶安元年・一六四八年）に(1)が、『牧民忠告諺解』<sup>(4)</sup>（慶安三年・一六五〇年）に(2)の③が触れられているが、それは量的には少ないものである。朱子学期・武教確立期の明暦二年・一六五六年の著作になると『修教要録』<sup>(5)</sup>に(1)と(2)の全てが、『治教要録』<sup>(6)</sup>に(2)の①と③が現れる。しかしこれは若干の例外を除き、主に朱子学の典籍からの引用から成っている。『武教本論』<sup>(7)</sup>では(3)と(2)の①③、『武教小学』<sup>(8)</sup>では(3)と(2)の②が現れる。

古学期以降は『山鹿語類』<sup>(9)</sup>（寛文五年・一六六五年）に(3)以外の全てが現れ、詳細な記述となつて提起されるのを見る。『謫居童問』<sup>(10)</sup>（寛文八年・一六六八年）も同様であり、(2)の③に関しては少なく、全体についてもやや分量的に少ない傾向もある一方で、『山鹿語類』の所論をさらに発展させた記述がみられるのが特徴である。

詳細な教育論・学問論の提示という点で素行の生涯の著作中では、ここがピークであり、以降の著作は再び部分的な記述にとどまる傾向がある。古学期以降は(1)に関して、教学の意義付けに『山鹿語類』等で示した論理を前提にしており、その点では、論の分量の多寡は必ずしも問題とはならないといえる。

(1)の人間形成論は四教一致期から古学期へかけて大きく転換をしている。古学期以降はその転換とその内容を説述することに多くを割いている。この四教一致期から古学期への転換は拙論でも検討したが、その転換が(2)の論を導く背景となつている点を指摘した<sup>(11)</sup>。

(2)は、後述する。(3)は武教確立期にその意義を明示し、以降は、

具体的に対応する内容が古学期以降の著作等に示されている。(4)は、朱子学期では中国の学問史に限定されていた記述が、古学期以降において、特に日本の学問史の記述が現れるようになっていく。(2)の①の歴史的な例証としての意味は古学期以降において強い<sup>(12)</sup>。

さて、以下には主に、(2)に関しての構成的な問題を考察したい。即ち、各論に対応するところの学習論の取り上げられかたとその変遷、同様に、家庭教育論、また社会教化論の中の特に学校論のそれを問題にする。

まず学習論であるが、古学期以降は全体の構成のうち前段に記述が集中して位置する傾向がみられる。朱子学期の『修教要録』では思弁的な性格の強い「道源」篇の後に「学問」篇が位置していたのと対照的に、古学期以降の『聖教要録』<sup>(13)</sup>（寛文五年・一六六五年）、『謫居童問』、『治平要録（治平旧事）』<sup>(14)</sup>（貞享二年・一六八五年）等、代表的な経学関係の書物はいずれも「学問」篇もしくはそれに相当する領域より説き起こされている。『聖教要録』では性理学特有の概念の内、抽象的な概念程後半に位置する傾向が読み取れ、一方「聖学」の在り方、即ち個人の学習論の領域は陶冶性の評価に続けて最初に展開されている。『謫居童問』では前段巻四までが「学問」篇に相当し、後段巻五から七までが「治平」篇に相当するが、「学問」篇の中にあつても、具体性をもった学問・学習の方法論が最初に位置している。共に「学問」篇の部分で具体的な方法論を提示し、それを土台に論が展開していることがわかる。

『治平要録（治平旧事）』は最晩年の著作にあたるが、ここでも同

様の構成を踏襲している。書名に示されるように本書の主題は政治であるが、巻一に「学問」篇があたり、また「学問」篇内の内容構成も『聖教要録』に共通している。『治平要録（治平旧事）』では思弁的な引用は大幅に後退した傾向があるが、構成的に学問・学習の方法論の位置付けが重要な意味を持たされていることが了解される。

政治と学問の関係にあつては、政治を司る君主には政治能力の基礎に学問・学習が必要であると且つその学問・学習が観念性を排してどの様に具体性を持ち実効性を伴うものであるかを問うことを主題にしてきた素行にあつて、学問・学習論から説き起こす構成が通例となっている。学問・学習の内容に触れる場合の詳述の度合いは著作の性格により深淺があるものの、触れた場合は抽象性の高い理念より、可視的で具体的な方法の問題が先んじる傾向がみられた。方法論の詳述という点では、『治平要録（治平旧事）』『聖教要録』等は「謫居童問」そして門人編纂とされる『山鹿語類』に譲る。

『山鹿語類』は素行学の集大成の観がある大著であるが、政治論と学問論の構成関係の点については、本書の場合は最初の「君道」篇で多く政治論に触れ、『聖教要録』に構成・論旨を一にする「聖学」篇が後段に置かれているため逆の体裁をしている<sup>(16)</sup>。しかし注意すると、「君道」篇の中での政治と学問の位置関係は前記と同様である。ここで「君道」「臣道」<sup>(17)</sup>以下、五倫を論じ、日本の土道を論じ、「聖学」篇を特別に置いた。この広範な体系の中で、一貫しているものとして、具体的な教育・学問への方法的な関心があることは拙論の中でも指摘してきた通りである<sup>(18)</sup>。

家庭教育論の場合は、朱子学期の『修教要録』では朱子学の典籍よりの引用にとどまるのみであったが、一方武教確立に呼応して『武教小学』で日本の武士の家庭での教育を主題にして、家庭教育の意義論及び幾つかの具体的な方法論が提示された。古学期に至つて、家庭教育論は項目として独立した形式を採るようになり、『山鹿語類』では多くの紙数があてられるに至つた。『謫居童問』では、発達を主題とした子どもの教育方法論を中心に、さらにそれが発展して論じられるに至つて<sup>(19)</sup>いる。

学校論の全体的な構成は、『大学衍義補』の強い影響下にあるが、朱子学期の『治教要録』がその書の枠組を出ていないのに対して、古学期の『山鹿語類』のそれでは、日本での適用を勘案した具体的な方策が多く論じられている。その具体的な方策が学校論の内容に現れており、ここに、素行が庶民学校設置論や庶民学校行政管理論に踏み込んでいる記述がみられるのである。尚、学校論は以降の著作には現れていない<sup>(20)</sup>。

## (2) 『山鹿語類』と教育論

家庭教育論における『謫居童問』を例外として、教育論としては、およそ『山鹿語類』をピークとして、素行の論は出尽くしている感があると指摘した。学習論の一部に若干『謫居童問』等にな説が提示されているが、基本的な部分では同一である。即ち具体的な教育論については、一部は「謫居童問」で更に発展・詳述をみているものがあるが、『山鹿語類』で完結している。『治平要録（治平旧事）』

の学習論などは『山鹿語類』の内容に一致し、いわば再論にすぎない。

『山鹿語類』はその点で素行の教育論考察の観点からも、集大成としての意味を持つものといえる。それは、中国古典、朱子学典籍の受容とその発展解釈という素行の思想的発展の面に則して言えば、『山鹿語類』にみる素行の教育・学問論は制度・方法の実態に対する知識の蒐集を基礎に、素行自身が工夫・創案を加えた所論の一部である。素行の教育論、特に問題にしている学習論、家庭教育論、学校論を中心に、『山鹿語類』の構成に注意して、その位置をみてる。

『山鹿語類』は、以下のように「君道」から「聖学」篇にいたるが、素行の教育・学問論が主に展開している部分は、以下の\*の段である。

君道	君徳	*①
君職		
親親		
賢賢		
使臣		
民政		*②
治教		*③
治礼		
国用		

臣道	治談	*④
臣体		
臣職		
仕法		
臣談		
父子道		
父道		
養礼		*⑤
教戒		*⑥
子道		
孝教		
養父母		
事父母		
父子談		*⑦
兄弟之序		
夫婦之別		
朋友之信		*⑧
三倫談		*⑨
総論五倫之道		
立本		
明心術		*⑩
詳威儀		
慎日用		

士談 \*⑪  
聖学 致知 \*⑫  
為学 \*⑬  
師教 \*⑭  
読書 \*⑮

経書

雑子

中道 理徳 仁 仁義 五常

誠 忠信 敬

陰陽 五行 天地 性 心 大原

①は主に君主の学問を軸に、学習論が展開されている。<sup>(22)</sup> 因みに学問史の記述が纏まってあるのはここである。

②が町の寺子屋に関して、③が総合的な学校論であり、農村部の寺子屋に触れている。<sup>(23)</sup>

④などの各篇毎の最後に置かれている「治談」「臣談」「父子談」「三倫談」「士談」は、各段の例話としての体裁になっており、そのため、教育論も該当するところに関して、断片的に所収され現れている。

⑤⑥に家庭教育論が展開する。<sup>(24)</sup> ⑧に学習論との関わりで教師論が現れる。<sup>(25)</sup> ⑩に学習論が現れる。<sup>(26)</sup> ⑩が士道における学習の意義を問題にするのに対して、「聖学」の⑪⑭は、具体的な学習の方法に踏み込んで詳述するのが特色である。<sup>(27)</sup>

全体の記述は「君道」の分量が圧倒的に多い。教育論・学問論の記述でいうと、構成の中で占める割合では、⑪⑭が多く。⑤⑥が次ぐ。そして②③である。こうした点では、⑧の「朋友之信」に至っては分量的には僅かだが、この後段に学習に資するという観点から教師論が登場しているのである。<sup>(28)</sup>

素行の教育論の構成的な位置は以上のようなものであるが、問題は、各々の関係である。各論として具体性が増す一方、それが他で述べられる各論とどう繋がるのか、疑問のある部分もみられる。それは具体論は現実の用法として提起される性格をもっているため互いの関連や体系性は希薄であるということに起因する場合もある。しかし、どのように互いの教育論記述が重なり合い、整合性を保っているかが問題である。

①で触れられる家庭教育と⑤⑥の家庭教育論との関係、②と③の学校論の関係、学校論と家庭教育論の関係、そして①と⑭以下の「聖学」篇各々の学習論の関係、またそれと学校論との関係等である。これらの問題は多く、各論に関する拙論で明らかにしてきたつもりだが、ここでは、①と⑤⑥の関係、そして⑩との関係について考察して、それが拠って立つ基底の思想並びにその観点を明らかにして、その整合性を確認したい。またこのことにより、他の部分についても類推が可能となると考える。

「君道」篇全体にわたって、君主自身がなすべき学問の問題と君主が施行すべき教化政策の問題がとり上げられ、この両者は経世の根本問題として扱われている。君主の学問については、「君徳」

としての学問すなわち、君主としての資質形成や社会化のために学問が要求されている。これは内容的には「聖学」を称する素行の学習論に収斂されることになる。君主自身の学問の問題は、効果のある方法論の検討を土台とした実効性のある学問によつて、その意義を全うするとみなされており、それが素行の論の主題でもあったからである。<sup>(29)</sup> また後継者の教育、子どもへの教育の方法の問題を主に論じるのは⑤⑥であるけれども、「君道」の中でも、君主の後継者ための教育の問題として現れている部分がみられる。<sup>(30)</sup> 「君道」の問題としての子どもの教育への関心とは、結局大概次のようなものである。

「幼君」の教育担当者は「武教」の心得を持つものでなければならぬ。「幼君」の社会化は教育の在り方によるからで、武家の当主として相應しい人格の形成を目的とした場合に有効なのは、素行の説く「日用の学」による教育が必要であるという。<sup>(31)</sup> 「人君子孫の教戒を詳にして、我が身終ると云へどもあとに心許なき儀あらざる如くなれば、常に存するに同じ。子孫の生質不<sub>レ</sub>宜、教戒不<sub>レ</sub>詳しては、こしかた行末の嫌疑未だ多くして事まかせ難し<sup>(32)</sup>」との意識を出発点にするものの、「武將子孫の教戒、猶ほ其の時代に順つて料簡あるべきこと也<sup>(33)</sup>」として、安定期の教育を思惟している。遺言また墓碑銘等での「遺戒」ではない、長期的な教育の成果を重視しているのである。<sup>(34)</sup> 素行は「嗣子の教戒」と表現していることが多いが、後継者の教育に関して次のように述べる。

諸侯大名の子、十歳の内外までは生質すぐれ金言を云ふと沙汰ある

も、生長の後に至りては、已前の言行の半にも至らざるのみ也。すべて人幼若の間は生質宜しく、後に至りて氣質変ずるもの、大体相定まれること也。案ずるに、幼若の間は情欲うすくして、天質未だ物に汚染することなし、其の上輔佐左右仕りつべき近臣をえらみ、傳保たるべき嚴臣を置きて、其の機を戒めたださして、幼主又これを聞入れて、傳保の臣を恐るるがゆゑ也。既に物ごち覚えて世情心深くなるに及んでは、情欲甚だ盛にして、幼主に威つき勢あるを以て、傳保の臣却つておそれて、其の非をただすことなりがたく、奸佞の臣折をえて人君の非を向へ悪をすすむ。人君又世情の知すみて奸佞の術をまうく。ここにおいて已前の生質悉く變じて、人の諫をうけず心の欲するに従ふ。是れ時によつて變化するのゆゑん也。たとへば悪をなさざる質ありと云へども、其の質懦弱にして人にまかせ、又世情を不知がゆゑに、才知を失つて人臣にまかするに至る類、古に其のためし多し。ここを以て案ずるに、幼主を輔佐せしむべき臣下と、壮年に及びなん時に伺候近習せしむべき臣下と、其の差別あるべきこと也。：

教戒は同じことなりと云へども、其の節を考へて其の徳を明にせしむることあらずしては、まことの道にあらず。：何事にも節をはなれることはなきことなれば、唯だ一筋に思ひこめては、よきこともたがふもの也。されば秋の霜の春の若葉にふりなんには、霜の物をみらしむべきわざもなくなるに同じ。人君として嗣子の教戒に怠りありなんひとは、國家の報本をむしばしむるに不<sub>レ</sub>異<sup>(35)</sup>。

右に述べられているように、君主の後継者教育の関心に対応しようとする意識から、その実効性の要望に應えるため、教育方法の適

正に関して、素行は「節」を軸とする論を説いたのである。

これが⑤⑥になると、やや一般武士の教育の問題として広がりをもせている観がある。「聖学」篇を含めて、全体の関心が君主論に貫かれている点は疑いなく、素行は主に上層の武士を対象に論じたのであるが、その君主論も、現実素行が説き来った対象の幅同様、藩主の後継者のみが論の対象となっているとは思われない。むしろ「士道」篇に現れている「武士という職分一般の在り方」を論じる中で、武士という職分とそこの教育・学問の在り方を説く主張こそが、素行の思想の基底部をなしていると思われる。君主の在り方とは、武士という職分を全うした方の中に見出されるのであり、素行の「武教」はそれを強調点としてきたのである。その点で教育論の記述の分量として少ない⑩の論旨の中に、実は素行の教育論提起の基底・基盤の問題が表明されていると考えられる。⑩が他の部分とどう関連するかは構成的には非常にわかり難い。両者をつなぐのは素行の職分論的観点に立つ社会化論であり、「日用の学」を陶冶材とする形式陶冶論である。

「父道」における家庭教育論の構成的な位置であるが、「父子道」は「父道」と「子道」とが対であることを軸にするが、「子道」が「孝敬」「養父母」「事父母」を中心に紙数を使うものの、「事」える側の「子道」のみが中心ではなく、「父道」に同様の紙数を割いており、その内容は「養礼」と「教戒」が相当している。「父道」が教育論を軸にしていること自体が特色である。

「養礼」と「教戒」を並べて説き、一般的に「父道」として親の

在り方、子に臨む心構えに関して述べた後、「養礼」即ち養育の問題から入っている。「教戒」に先立つ養育として、それを対比させ、養育の延長に「教戒」を配置する。

「士道」篇の構成と趣旨ともに『武教小学』の内容に対応しているが、また『武教小学』の「子孫教戒」<sup>(36)</sup>が「父道」の教育論に対応しており、「子孫教戒」の論旨に加えて、ここでは更に詳細な教育論が展開するのである。<sup>(37)</sup>

子どもの教育期として、「父母は子の手本なりと深く思うて：父母壮年の間は家を齊へ子孫の教戒を専らとし」<sup>(38)</sup>と述べ、親の子どもへの教育への集中を促し、責務を説く。「利欲」が子どもに絡む実態を繰り返し指摘しつつ、「誠の天性」と表現して、教育の正鵠を得ることを説く。厳し過ぎても放任でもならない中庸を得ることを説き、「其の天性に順て其の養を具にし、其の教を詳にする也」<sup>(39)</sup>と養育から入り、それは「教は唯だ天性に随ふのみ也、戒は其の天性にそむく處を戒しむるのみ也。：別に外よりもち来りて教ふる處あるに非ず、各々天性ののりにしたがふの教まで也。」<sup>(40)</sup>と再三強調される。女子教育が強調されるゆえんは「子ををしへて母儀を全くする」<sup>(41)</sup>という事由によるが、これは家庭での教育が極めて重要であるとの認識が素行にあるからである。

家庭教育論の到達点は『山鹿語類』の論を発展させたと指摘した『適居童問』の発達に即応した教育方法論に相当する記述にみるこゝとが出来る。素行は『適居童問』のこの記述を「小学・大学の教」と称して改めて意義付けている。「小学・大学の教を本として、其



の已後一生の学は只日用の間知を明にいたして、邪正明白に惑はしめざるまでのこと也<sup>(42)</sup>と述べられるが、素行においては、「小学・大学」と段階的に称しながらも、朱子学で一般的に分類した場合の「小学」がむしろ重要なのである。<sup>(43)</sup>それは「日用の学」として卑近な陶冶材による乳児からの習慣形成・社会化を基礎とするからである。

素行の『大学』解釈で注視されるのは、素行が「小学・大学」と定義づける時、それは学校階梯や学習の順序の指摘に現れる「小学・大学」の区別を意味しないことである。それは『四書句読大全』の『大学』においても明示されている。<sup>(44)</sup>『大学』は素行の最大の重要書であるが、概念として「大学」の意義は「聖学」に等しく、それは素行にあってはむしろ「小学」の土台の中で形成されるものである。換言すれば、「小学より大学に至るまで更に離るべからず<sup>(45)</sup>」とあるように、素行では分断された「小学」「大学」はありえず、「小学」「大学」両者は「大学」として包含され、性質としては「小学」的要素を持っている。それはレベルの低い学習課程としてはではない積極的な意義を内に含んだものである。

朱子が「小学の書を書き、以て大学の始教と為す。…小学を以て事に熟することとし、大学を以て理を究むる事となすなり。」とするのに対して、素行は、

事能く熟すれば、其の知乃ち極まる。小学の事物自ら致知の至あり、故に聖人定むる所の小大学の設、小大の名號ありと雖も、悉く是れ格物致知の教にして、其の学は是れ共に大学なり。<sup>(46)</sup>

と述べているのである。

### (3) 「士道」における教育論の位置

前述のように、素行の思想全体の上で、教育・学問の意義論の起点は何かを考える時、「士道」での教育・学問のとらえ方の如何が重要な鍵であると思われる。

「士道」の中では、「明心術」の中の「練徳全才」の「才」に「博文」また「詳事物」として学習の問題が表われている。<sup>(47)</sup>その分量は決して多くはなく、意義論にとどまっていた。そして「士談」の中で、「風流」の項においてむしろ断片的な学問史の記述としてあらわれ、術学や文芸趣味的な学問との峻別を問題にしているのを見ることが出来る。<sup>(48)</sup>それは主に学問のための学問ではないことを説くことを主旨とした意義論の前提となる、いわば事例となっている。

意義論の向かう所は、素行の「日用の学」に収斂する。<sup>(49)</sup>武士の学問・教育が「日用の学」である事由とその必然性は、素行自身の次の述懐によく窺うことが出来ると思われる。

人皆不成一事、而年云暮れなんとするをのみ思ひ、寸陰尺璧を重んじて、朝よりつとめて夕に到り、短檠日影について夜をあかし日にくらさんことをおもふ、其の所勤何事ぞや。唯だ読書稽古の事のみにして、専ら労役紛擾して一生を送るにいそがし、甚だ以て誤了す。聖人は天地の如く能く物と推移る。凝滞せば天地ここに破却すべし。故に花にそひ柳にたはぶれ、時とともに消息して、物來れば物、事來れば事、可思ことあるときは思ひ、可行ことあれば行ひ、急緩動静是れ必



ずとすることなし。朋友の交接、世間の事物、皆人倫の當然也。これに交はりこれをなすは暇のつひえ也、學し習ふにありと云ふは、世と學と相へだたれば也。<sup>(50)</sup>

この記述は寛文元年頃のものであり、素行が浅野家を致仕した年にあたり、朱子学転回の直前の時期にあたっている。素行によれば、武士の学問・教育が「日用」である必然性は職分の全うという観点から導かれる。素行の学問意識の出発点ないし土台は「武士の学問・教育」にあつて、「武士としての」という部分を職分論・職能論から追求する姿勢から導かれた。その結果「武教」の必要性が強調されたのである。<sup>(52)</sup>

「武士として家職あり」の「家職あり」という意職と、教育・学問の関係が問題なのである。それは素行の学習論で繰り返し指摘されるが、その背景には、以下の前提があるように思われる。

① 素行にとって、人間形成とは、社会化を軸になされと考えられている。社会化は素行の場合、本有観念の否定を土台とするため、結果、人間同志の関係論で思惟される。そして職分・職能の形成が軸となっている。

② 従つて学問のための学問には意義をみていない。研究的な方向は弱く、兵学の専門知識についても、研究というより、知識の精力的な蒐集と体系化という仕事に終始している観がある。

③ 学習等の手段が現実的になるのは、実態を受けての説述が多いためである。理想態は、常に現実との比較によつて評価がなされる傾向があり、結局、代替論等に落ち着く傾向がある。理想態とし

ての方法に固執する観は必ずしもみられない。

「士道」の中で、どのように学問の存在意義と論が提起されてくるのだろうか。「士談」の中には、断片的に記述が現れて、「才」としての位置が明らかにされるが、存外「風流」ないし「遊芸」の記述の中に現れるのは、それらが「礼楽射御書数」の「六芸」として想定されているからである。「礼は朝古今の制を具にして、時義を以て用捨して其の宜しきに叶う可き」<sup>(54)</sup>とされるように、素行の述べ来たる「日用」論に帰着する方向を持つ。「書」も「物を書くまでを云ふにあらず、読書して文字を読み覚え古今の事をする」<sup>(55)</sup>ことである。各制法は古典に書かれてある礼法をそのまま行なうこと並びに懷古や復帰ではないとして<sup>(56)</sup>いる。素行にあつては、「六芸」の内、「楽」のとりえ方をどう教学と摺り合せるかが問題となる<sup>(57)</sup>ところであるが、猿学などの評価のように「ちとは稽古候て可然」という趣味教養の観点からのとりえ方とともに、「遊芸」としながらも閑暇には「六芸」を陶冶性の高い時期に「早く習はしつくさむ」<sup>(58)</sup>とされるのを見ることが出来る。「芸に遊ぶが如く平生心持いたさば」<sup>(59)</sup>などの記述も併せて考えれば、即ち「六芸」的性格とは、卑近さ、そして「日用」につながつてゆく「平生」の「業」としての性格を持つものであり、それを素行が重視していることが了解される。社会化が有意味に成つてゆくために、素行は「日用」論を問題とした。「士道」における「士道のつとめ、職分のつとめ」とは何か。これに関して、

ここを以て、往古は人生れて八歳にして既に物知ること有る時は、

学校に入れて小学を学ばしむ。小学と云ふは礼・楽・射・御・書・数・洒掃・應對・進退の節、すべて我が職分と仕るべきわざに於ては、詳に其の用法を盡して、容をねり手足をならし記載することを覚えて、其のことわざに不暗が如く、手習ひ足熟し、口耳の学を習練せしむ。<sup>(60)</sup>

と述べている。以下には「大学」の意義が説かれているのだが、このように学校の教育内容として提唱されるのをみるのであり、「後世に及んで此の教たたず、人唯だなるのまに成長して、有るべきことにまかするを以て、幼弱より壮老に至るまで、つひに一事の職をつとめ道をしることなし。たまたま志出来て初めて職を学ばんと思ふものも、或は壮年に過ぎ或は老衰して手足進退骨節相とのはず、記載うすくしておぼえしること不叶。：道に志ありと云へども、其の職業をつとむること不能して、只空談のみ也。彼の八歳にしてつとむることを壮年にしてつとむるになれるゆゑに、其の勤皆時を失ひてやみぬ。是れ聖教の世に不行がなす處也。向後大丈夫のつとめに志あらん輩は、此の處を守りて子孫の教戒を不可怠也。」として教育の意義論に結び付いている。

学問は「世事の用をととのへ、父につかへ君につかへ朋に交はりて：能く其の理にかなはしめんため也。」<sup>(62)</sup>と社会性が強調される。「世の学に志し道を求むるの輩、多くは世人と交はるをば益なしと號して、その会をのがれてその隙に書をよみ学をねらんなど云ふことを専らとす。是れ甚だあやまり也。遊会するも世のことわざ也。」<sup>(63)</sup>とある。

「士」のみならず職分をつとめるための教育が機関にしろ、その

代替にしろ要求されているわけである。学校論に代替論がみられるのは、素行が機関による教育を必ずしも前提としたからではなく、この意義を個人の学習や家庭教育の中で満たせば可と考えていたからである。「日用の学」の性格上も、また現実的にも、家庭教育の在り方が積極的に意味を持ち、また何よりも子どもがどう社会化してゆくかという過程そのものが重要になっている。さらに実態的には、家庭教育でその趣旨が満たされることにも限界がある以上、陶冶性を前提に個々の学習によりながら職分の全うに資するよう社会化を果たしてゆくことを期しているのである。

相應の職分が果たせるように教育することを求めているのであり、幼児に突然家を継がせざるをえない件等には、素行は不賛成<sup>(64)</sup>で、十分な社会化の必要性を説くのである。

また職分は決して狭い職能をいうのではなく、「何ぞ我が一役のこと斗りを専らとして他の事をば不用と云ふべき。：先後をしるに利あつて、一つも棄つべき處なしと可知也。」<sup>(65)</sup>とされているように幅を想定している。

そこには判断力の養成を軸に形式陶冶的な意義を目的にみている。「古今の事跡目に触るるもの皆学にあらずと云へる事なし。」<sup>(66)</sup>と言えるのは、そのためであり、「本を覺りて理に徹し事物をつくして其の用法を詳にせる人の言は、出て人の法となり教となりぬべし。：：当話自由を得る、是れを法言と云ふべし。」<sup>(67)</sup>という素行自身の自負も、単なる固定した知識・技能・規範の域を越えていることを示している。

素行の論述の中から陶冶材として想定しているものを抽出してみると例えば、次のような項目がみられる。

(1) 「博文」

『大学』『論語』を中心に、『書・詩・易・礼・春秋』そして各「賢伝史子」の書、また日本の政治・歴史等の知識。

(2) 「日用」

- ① 幼児からの習慣
- ② 善悪の判断
- ③ 六芸の「業」
- ④ 家職
- ⑤ 日用の委曲品節<sup>(68)</sup>

「博文」としての知識の習得の部分と、そして「日用」とされる様々の実践的・経験的要素を持つ部分からなっている。

また幾つかの記述を整理すると、以下のようにまとめられる。

- (1) 文字・訓詁・象数・名物凡例の記憶
- (2) 日本武家の歴史の学習。  
地形・風俗・方言・産物。
- (3) 人情人情の長所短所の考察。

(4) 『大学』『論語』『書・詩・易・礼・春秋』『賢伝史子』による  
古典の、聖人立教の根本思想・政治理念。

言行録、礼楽制度の詳細、歴史。

(5) 天地（天文・暦数・自然地理的領域）

(6) 六芸（文武の事物の学習・武芸）

(6) 「業」「作法」（社会性、職能、日常の生活規範）

一身の動静、齊家、起床就寝、視聴、言語応対（会話）、容貌身なり、衣、食・飲食、住・用具、財産、物品のやりとり（周施）、子どもの教育、鷹狩、閑居の用、交接の礼（賓客の応接）、家族、交友。

これらは、(1)と(5)など、重複が感じられるものの、(6)にみられる諸般の生業を陶冶材として位置させるところに素行の大きな特色がある。<sup>(69)</sup>そしてこれらは「致知」を目的としており、「日用の委曲品節の知を致めしむ。」とあって、「日用の委曲品節」を記憶するのはなく、形式陶冶観に立つのである。(6)に関しては、いわば「日用の学」の指標としてのテキストに『武教小学』があり、その役割を果たしたことは、証左であるといえよう。

(6)の項目内での教育的意義の説かれ方は、例えば、「況武士平生のたしなみ、…心に理を存すといへども身支へ心のままにならざれば、…彼は皆練の不足所より其の失出来るになりぬべし。若年の内に可習也と云へり。古人小学を立てて…と続く形で、「容貌をただす」意義が述べられていた。<sup>(70)</sup>立ち居ふるまいの修身論の一環であり、容貌を正す意義として、『武教小学』で述べられていた武器・兵書等に接する時に威儀を正す論旨が再論されているのを見る。<sup>(71)</sup>

(結)

素行の教育論をその各論に焦点を当てて、論述の構成的な問題から考察してきたが、構成的に曖昧な点から生じる、各論の関係の問

題にどう整合性があるのかを、素行の「日用の学」観を軸に明らかにしたつもりである。

陶冶性評価を前提とした学習論・家庭教育論・学校論とりわけその具体論こそが思想全体の柱になりえている点、特に君主論としての性格と武士の職分論を起点とする教育的関心の問題を軸に、整合性を保つことが確認出来たと考える。分量的に少なく、構成的には中段の位置にある「士道」に基底となる思想を探る結果となった。

自然性に符合すると素行が理解するところの乳幼児からの教育方法に対する見解を前提に、形式陶冶観を特色とする子どもの社会化に関する見解が基底にあるのを見た。それが、特色ある陶冶材のとなえ方につながっている。

思想の構成的な特質に関わる問題は、比較研究を要するところである。また陶冶材の内容の問題等は稿を改めて検討する予定である。

## 註

- (1) 拙稿「山鹿素行の学習観―『聖学』の方法論を中心に―」(工学院大学研究論叢第三三三号)平成七年十二月、「山鹿素行の児童教育論―児童理解と教育方法を中心として―」(早稲田大学大学院文芸研究科紀要別冊第一集)昭和六〇年一月、「山鹿素行の学校論について―成立過程を中心に―」(早稲田大学大学院文学研究科教育学研究室教育學論集第八号)昭和六一年一月、「山鹿素行の教師観―学習観との関連を中心に―」(工学院大学研究論叢第三四号・平成八年二月)を参照。
- (2) 拙稿「山鹿素行の教育観の形成―四教一致から古学への転回を中心として―」(工学院大学研究論叢第二八号)平成二年十二月、「山鹿素行の教學観―武教の成立を中心に―」(工学院大学研究論叢第二七号)平成元年十二月、「山鹿素行の学問史観―日本の学問史を中心に―」(工学院

- 大学研究論叢第二九号・平成三年二月)を参照。
- (3) 広瀬豊編『山鹿素行全集思想篇』昭和二五―一七年・岩波書店・第一巻所収。
- (4) 同前所収。
- (5) 同前・第二巻、第三巻所収。
- (6) 同前・第一巻所収。
- (7) 同前所収。
- (8) 同前所収。
- (9) 同前第四巻、第十巻所収。
- (10) 同前第十二巻所収。
- (11) 拙稿「山鹿素行の教育観の形成―四教一致から古学への転回を中心として―」(前掲)。
- (12) 「山鹿素行の教學観―武教の成立を中心に―」(前掲)、「山鹿素行の学問史観―日本の学問史を中心に―」(前掲)を参照。
- (13) 「山鹿素行全集思想篇」(前掲)第十一巻所収。同前・九―一頁。教師論・教化論に先んじている点も構成上注意される(「山鹿素行の教師観―学習観との関連を中心に―」(前掲)参照)。
- (14) 「山鹿素行全集思想篇」(前掲)第十二巻・一五―一九頁。
- (15) 同前・第十四巻・五六七―五九六頁。
- (16) 「聖学」篇は「聖教要録」では「聖人・知至・聖学」とあり師説と教説は「師道」「立教」とあり、「読書」では、それが内容中心に「詩文」「道統」を並列させている。「中」以下は「道・理・徳・仁・礼・誠・忠恕・敬恭・鬼神・陰陽・五行・天地」「性・心・意・情・志・氣・思・慮・人物・之・生・易・有・大・極・道・原」の構成になっている(「山鹿素行全集思想篇」(前掲)第十一巻・九―三二頁)。
- (17) 山鹿語類聖學篇序・「山鹿素行全集思想篇」(前掲)第九巻・三―四頁参照。
- (18) 「山鹿素行の教學観―武教の成立を中心に―」(前掲)他参照。
- (19) 「山鹿素行の児童教育論―児童理解と教育方法を中心として―」(前掲)参照。
- (20) 「山鹿素行の学校論について―成立過程を中心に―」(前掲)参照。
- (21) 日本の学問史の記述を除いては、その論の発展部分に関わる日本の実態等の素行自身の観察等による情報については、資料的には不明である。学習論等は主に素行自身の私塾での経験を土台にしている面が看取され

るもの予想の域を出ない。学校論に現われる学校代替論は、中国の典籍によらず、日本の実態の中から引き出せる施策の限界を意識しているとみられる。学問と教育をめぐる素行を取り巻く現実態とは、学習論については、彼自身の学問講義、私塾での講義であり、家庭教育論は大藩から一般武士家庭に至る幅があるが、そこでの子弟教育を前提にしている。学校論は寺子屋である。

- (22) 『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第四卷・二六〇―三三頁。  
(23) 同前・第四卷・四〇八―四〇九、四二二頁。同前・第五卷・三一―四七頁。

- (24) 同前・第六卷・二七一―三〇九頁。

- (25) 同前・五四一―五四七頁。

- (26) 同前・第七卷・四〇―四四頁。

- (27) 同前・第九卷・一三―二二七頁。

- (28) 同前・第六卷・五四一―五四七頁。

- (29) 素行の学習論に関しては、「日用の学」を軸に、目的論・方法論を中心に拙稿で検討している。そこで考察を前提として、本論を進めている「山鹿素行の学習観―聖学」の方法論を中心に―(前掲 参照。学習の内容論に関しては、また別の稿を予定している。

- (30) 同前・第四卷・一三一―一四一頁。

- (31) 同前・第五卷・五〇一頁の例話参照。

- (32) 同前・五〇〇頁。

- (33) 同前。

- (34) 「若し子孫戒守すべきの厚德あれば、明かに之れを書き、子孫碑を拜して以て戒と為す、是れ銘の実なり。」(枕塊記・上・山鹿素行全集思想篇」(前掲) 第十四卷・四五二頁)としながらも、中世の「士談」では例の少ない方向である教育論へと展開するのである。

- (35) 『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第五卷・五〇四頁。

- (36) 同前・第一卷・五一〇―五一二頁。

- (37) 同前・第六卷・二七一―三〇九頁。

- (38) 同前・二七〇頁。

- (39) 同前・二七五頁。

- (40) 同前・二九六頁。

- (41) 同前・二七五頁。

- (42) 掲書・同前・第十二卷・二八頁。

- (43) 「山鹿素行の学習観―聖学」の方法論を中心に―(前掲) 参照。

- (44) 掲書・『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第十一卷・七二頁。

- (45) 同前・七三頁。

- (46) 同前・一一二頁。

- (47) 同前・第七卷・四〇―四四頁。

- (48) 同前・第七卷・三二七、三三三、三三七頁等。

- (49) 「山鹿素行の学習観―聖学」の方法論を中心に―(前掲) 参照。

- (50) 『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第七卷・三五九頁。

- (51) 万治三年(一六六〇年)の記述であり、翌年の寛文元年(一六六一)年にこの心境を次の漢詩に示した。

窓前昨夜雪猶盈

殘滴向陽琴筑聲

送歲迎年古今事

鯨梅傍柳有遊情

- (52) 『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第十五卷・七二七頁)

- (53) 「山鹿素行の教學観―武教の成立を中心に―(前掲) 参照。また素行における兵学と儒学の統一の問題に関しては、前田勉「山鹿素行における兵学と儒学の関連―素行学確立以前を中心に―」・愛知教育大学研究報告四三・一九九四年を参照。また素行の思想の起点を探る上では、立花均氏の一連の論文が参考になる(「山鹿素行の用の思想と朱子学批判」・倫理学年報四三・一九九四年他)。

- (54) 『山鹿素行全集思想篇』(前掲) 第七卷・四一、四三頁。

- (55) 同前・七七頁。

- (56) 同前・七六頁。文書の書式についての記述も併せてみられる(「山鹿素行全集思想篇」(前掲) 第八卷・四八〇頁)。

- (57) 同前・第八卷・五四四頁。

- (58) 同前・第七卷・七七頁。同前・第八卷・五〇九頁、同前・五二九頁参照。

- (59) 同前・第八卷・五〇八頁。

- (60) 同前・第七卷・一九一頁。

- (61) 同前・一九一―一九二頁。

- (62) 同前・第八卷・四八四頁。

- (63) 同前・六一三頁。

- (64) 同前・四四七頁参照。  
 (65) 同前・四四三頁。  
 (66) 同前・四二七頁。  
 (67) 同前・四七九頁。  
 (68) 同前・第九卷・一七頁。  
 (69) 同前・一〇六頁等参照。尚、以上に記述した陶冶材として該当する学習内容論に関しては別途整理、検討し、考察する予定である。  
 (70) 同前・第八卷・五〇一〜五〇二頁。  
 (71) 同前・五〇七頁。

(本学助教授)